

世界大学史と愛知大学

酒井吉榮

〈愛知大学名誉教授〉

司会 「世界大学史と愛知大学」というテーマで3時半までお話しいただきます。その前にセンターの所長さんであります藤田佳久博士からご挨拶をお願いいたします。

藤田 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました藤田と申します。現在東亜同文書院記念センターのまとめ役を担当させていただいております。最近こういう機会が多いものですから、私の挨拶はいつも同じようなものになって恐縮なんですけれども、記念センターは今年度から文科省のオープンリサーチセンターに選定されて、スタートいたしました。基本は東亜同文書院の研究と情報公開なんですけれども、それに関係しまして、本学は東亜同文書院と非常に強い関係がございますので、その関係で旧制大学と愛知大学ということで、そちらのほうは大島先生をお願いしております。実質半年しか過ぎていませんけれども、精力的に研究をやっていただいております。

そこで今日はそういうプロジェクトに関わったことで酒井先生をお招きすることができました。



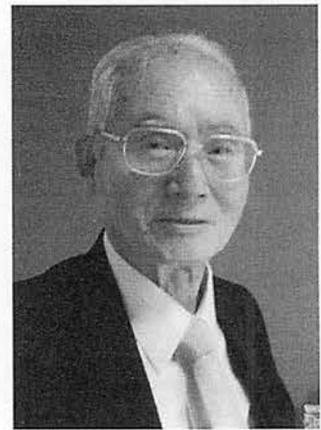
藤田佳久教授の挨拶

酒井先生は憲法がご専門ですが、いろいろ広い勉強をされていて、先生は法学部、私は文学部であまり接点はなく、学問的な薫陶を受けるチャンスがございませんでした。しかし

学内の評価と言いますか、酒井先生のプロジェクトのことはよく心得ています。

今日はここにありますように「世界大学史と愛知大学」ということで、愛知大学をどういうふうに位置付けるか、あるいは東亜同文書院大

学をどういうふうに位置付けるか。これは自分達がやると自画自賛になってしまうところもあるので広い視点からご講演をいただければと思います。先生は特にドイツにおけるベルリン大学に詳しく、愛知大学とベルリン大学との関係如何という非常にスケールの大きな話題を伺う予定になっています。なかなかそのお話を今まで伺うチャン



酒井吉榮愛知大学名誉教授



講演会には多くの人が訪れた

スがなかったので、そういう点で今日は皆さん方にごゆっくり先生のお話を伺っていただきたいと存じます。

なおお隣に大林先生がおられますので、今日は酒井先生の絶妙の補佐役をさせていただきます。

ということで私の挨拶は終わります。

酒井先生ご紹介

司会 それでは酒井先生の講義に入る前に、私のほうから1つお話を申し上げたいと思います。

「大学は何でも研究する」と言われています。しかしながら大学自体の研究はあまりしていない。それは世界の大学の趨勢だと言われています。ところが愛知大学はそれに先立って昨年秋から愛知大学史の講座が開講されました。同時にこの4月からは豊橋の校舎でも愛知大学史の講座が開かれます。その愛知大学の歴史をテーマにいたしまして、授業科目の中に設け、そしてこの愛知大学がどういう歴史を持ってこの60年間栄えてきたか。それは物証と歴史によって伝統ある愛知大学の60年の講座、ひいては同文書院から来る100年の歴史を、愛知大学の大学史というテーマの中に収めて講義をする。

今日はその中で特に「世界大学史と愛知大学」というテーマで、いかにも大き過ぎるような話がありますが、実は大変類似性のあるベルリン大学と愛知大学、あまり堅い話になりますとちょっと



司会を担当する越知専客員研究員

テーマも堅いものですから、お話ししますけれども、実は皆さんご存じの白足袋・袴の吉田茂さん、戦後の有名なワンマン総裁のところに、豊橋の不二タイムス（東日新聞の前身）という新聞社の社長杉田有窓子さんが、新聞記事取材のため大磯に対談を申し込みに行きました。そして話をしている間に、ロンドンタイムスと不二タイムスとの関係という話が出たそうです。そこへたまたま賀屋興宣かやのりさんが見えました。その賀屋興宣さんに「こちらは不二タイムスの社長さんです。不二タイムスとロンドンタイムスとは関係がおありのようでございます」と言って紹介したそうです。そうしたら杉田有窓子が「ロンドンテムズ川と、豊橋は豊川と海でつながっています」というお話をされた。まあ1つのエピソードでございますが、さてベルリン大学と愛知大学の関係、どういってお話を酒井先生にさせていただけるか、皆さん楽しみに1時間、ゆっくりとお聞き願いたいと思います。

ところで酒井先生は満88歳になられました。昨日からちょっとお風邪気味で、点滴を打たれたそうです。今日は約束事だから何をおいてもということで、大林先生を従えておいでいただきました。大林先生は酒井先生のお弟子さんで、通訳もしていただけるそうですので、楽しくお話が聞けるかと思えます。私の友人である倉橋健二先生（愛大大学院の昭和48年の卒業生）のお話を聞いていますと、大林先生と1つ違いです。酒井先生と面識もありますので、今日はこういう催しがありますよとご案内をしたところ、お祝いに花を届けていただきましたので、事務局のほうから酒井先生にお渡し願います。酒井先生、88歳のお祝いです。お受け取りください。

酒井先生の履歴についてはレジメをお渡ししてあります。詳しくお話しすると1時間にも2時間にもなるぐらい、著作もありますし講演もありますので、堅いお話は抜きにしまして、酒井先生の趣味についてお話しして、学者としての酒井先生についてはご自身からお話をさせていただきます。酒井先生は大学の憲法の勉強だけではなくて、大



88歳を迎えられた酒井先生にお祝いの花束が……
隣は大林先生

変趣味が広がっています。大学では55年間、ロンドン大学、あるいはアメリカの大学、日本の大学のそれぞれの歴史憲法を調べました。同時に植物愛好家でございます。人間を愛すると同時にたいへん植物・環境・自然を愛します。愛知大学にこのように自然に植物が保存されて生き生きとしているのは、酒井先生のお陰と言ってもいいんです。酒井先生は愛知大学で「緑のおじさん」と呼ばれていました。20年間緑化委員長としてご活躍でございまして、「松の木1本も伐採ならん」というぐらいで、困った時もあったようです。木を愛するだけではなく、庭の設計もします。愛知大学の記念館の南側に庭園がございまして、枯山水の50坪の庭園。その設計をしたのが酒井先生です。それからもう1つ、皆さん愛大駅でお降りになったら分かりますが、77mの、そして幅3.5m、5.8mのホームの中に、松の大木が11本生えています。ホームの中に木が植えてある。木を切つてはいけなからホームの天井に穴をあけて木を生かしている。ユニークな駅だということで豊橋鉄道さんもたいへん喜んでいて。そういうような植物愛好家でありかつ憲法学者の酒井さんです。

もう1つはこういう茶碗があります。天目茶碗。これは酒井先生の作なんです。酒井先生に今日差し上げます。酒井先生の先生である名古屋の陶芸家古橋尚^{たかし}先生のところに酒井先生は6年間、毎月2回土曜日に通っております。芦原の駅で電車



酒井先生の御著作『学問の自由・大学の自治研究』『世界大学史と愛知大学』『アメリカにおける新しい平等の創造』



「緑のおじさん」たちのアドバイスにより愛知大学駅はユニークな姿に



記念館南側の枯山水（酒井吉栄設計）



新しい校舎の間にそびえる木々は大学創立時の精神を今に伝える



自宅に飾られたコレクションの美術品と、自作の200点の茶碗の一部

に乗って、渥美線新豊橋で降りて名鉄に乗り換えて地下鉄に乗り換えて2時間。一生懸命に茶碗作りに通います。古橋先生も驚くぐらい熱心で、これは先生最後の窯の作品です。卒業祝いに古橋先生から「越知さん届けてくれ」ということで、今日は酒井先生にお渡ししてあります。

こうやっていろいろお話ししますのは、堅い話にならずに、そして先生もちょっとお疲れ気味なものですから、時間をちょっととらせていただくということで、ご了承願いたいと思います。

もう1つの趣味は最近です。油絵に熱中しております。印象派の作品からピカソの作品までやろうというわけで今、ピカソの裸体画を複写しています。たいへんユニークな先生で、絵もやる、庭も作る、陶芸もやる、そして憲法学者ということで、今日は楽しくお話を聞いていただきたいと思います。それでは酒井先生、お願いいたします。



私と愛知大学

酒井 ご紹介にあずかりました酒井です。ちょっと2、3日前から体調を崩しまして、昨日も点滴を打っていましたが、皆さんが苦勞して時間割を決められましたので、それを変えることは絶対にできないという法律家の意地があつて出てきました。

さて私は今大学史を長年やってきまして、最近油絵をやっているんです。それは少年の夢であった芸術家というものの夢がまた再び頭をもたげてきまして、自宅では油絵を書いています。そのためには模写としてピカソから始めてどのような絵も描いており、私の家においでになりますと裸体画があります。しかしそれ以後は自分の領域の風景画です。これが済んだら九州に飛んで行って郷里の名所を絵にしたいと思っています。私は風景画の中でも溪谷（^{くらがり}闊刈溪谷などの）を特徴にしているものですから、そこに行って資料を集めてきてあとで描いています。ですから常に私の側には80本の絵具があります。

それからまた勉強する学問は色彩学というので、これは実は物理学なんですね。その他に網膜の問題がありますので、眼科のお医者さんの学問もしなければいけない。そういうことでなかなか忙しい。今日の催し事に異議を唱えるわけではありませんが、ちょっと時期が遅かったかなと思います。私に与えられたのは、愛知大学に関係して2回目の名誉なことです。1回目は、九州大学から来たばかりの、海のものとも山のものとも分らない青二才の私に、本間先生のお持ちになっていた法学の講義を代わりにやれと言われた、これは最高の名誉だと思います。第2回目は今日の催しであります。先ほど言いましたように、今は油絵に夢中になりますけど、私は今社団法人二科会から言われまして、来年の春の二科展に出品する絵を準備しており、ちょっと大学史の問題からは離れていまして恐縮であります。

さて私が愛大のことに関心を持ちましたのは、図書館の入口に愛知大学の建学の精神の碑があります。あの前を通るたびに私は、この原文はどなたがお書きになったんだろうかということに常に疑問にしていました。しかし私の勘では、これは確かに漢学の素養のある人だというふうに睨んだんです。かつてある大学で投書事件があつた時に、今はワープロの時代ですから筆跡で鑑定ができませんが、ちらっと思うのは文章を書いた人はおそ



さかいよしひで
酒井吉榮プロフィール

【経歴】

愛知大学名誉教授、北京大学客員教授、法学博士、ハーヴァード大学客員研究員、九州大学講師、名古屋市立大学講師、南山大学講師

【主著作】

『近代憲法思想史研究』（評論社、1961）、『アメリカ憲法成立史研究第1巻』（評論社、1965）、『アメリカ憲法成立史研究第2巻』（評論社、1988）、『憲法学講義』（評論社、1975）、『学問の自由・大学自治の研究』（評論社、1979）、「アメリカにおける大学の自治」田中英夫編『英米法の諸相』（東京大学出版会、1980）、「国会の地位」清宮・佐藤編『憲法講座第3巻』（有斐閣、1964）、『憲法学原論』酒井・大林共著（評論社、1990）、『比較憲法学』酒井・大林共著（評論社、1999）、『アメリカにおける新しい平等の創造』（評論社、2005）



酒井先生によるピカソの模写

らく漢学に通じている人であろうと推測しました。文章には、スタイルというのがあって、夏目漱石なら夏目漱石、蘆花なら蘆花、そういう人には文章のスタイルがあるので、その人の文章を調べれば分かる。私は林毅陸先生だというふうに予想をしまして武田学長や山本事務局長にそれを言って、慶應大学に行って調べたんです。慶應大学の三田の本館には福澤研究所というのがありまして、これはナンバー1の福澤先生の研究をやる場所ですが、ナンバー2は林毅陸先生なんです。

林毅陸先生は若い日に高松で漢学の素養を受けて、恩師に子供さんがいなかったので養子に行かれて林になられたんです。林先生については『生立の記』というのがありまして、今まで分かりませんが、それに記録もあるんじゃないかと思って、福澤研究所で長い間書き続けられた日誌を調べました。それはたいへんなことでした。と言うのは5時になると事務所が閉まりますからそれまでに見てしまわなくてはなりません。しかし日誌は

30年にわたっておりました。大急ぎで見ている時に私を助けてくれたのが、私の孫にあたる者で、慶應大学の博士課程におりました。

日誌の中に書いてあることですが、毅陸先生は同文書院の母体である東亜同文会の理事をしておられまして、いかにそれに熱心であったかということが、愛知大学の学長を引き受けられた原因です。もう1つは解散の清算人であったため



建学の精神を伝える「愛知大学設立趣意書」碑

愛知大学の父たち



初代学長 林毅陸と
「生立の記」



2・4代学長 本間喜一



3代学長 小岩井浄

「生立の記」には初代学長就任のいきさつが書かれている

に、これを本間先生と小岩井先生が言われますと、初めは固辞されました林先生も断りかねた。「それではあなたは、戦争が始まり、大陸にたくさんの学生を残して、学生が卒業しないままにいる。それでいいのか」ということを言われた時に、林毅陸先生は「それでは引き受けましょう」と。私はその時に勝海舟と西郷隆盛の会見に相当すると思ったんですけれども、「西郷隆盛論」を読んでいると、ちょっと割引して考えなければいかんと思うんです。西郷隆盛のほうが偉いとわれわれは思っていましたけれども、高輪の会見は立派でしたがそれ以外は西郷隆盛がアホだったと。私は一時西郷隆盛のことが頭にきて、九州に集中講義に行った時に足を城山まで伸ばして西郷さんの最後のところを事情聴取したんですが、そのあとで西郷さんが作った私学校に行ってきたんです。私はそこで西郷さんにももの申したんです。「あなたは確かに勝海舟との会見では立派なことをなさったけれども、それ以外はあんたはアホじゃ」と。

と言うのは、西郷さんは目先のことばかり考えていた。さしあたり目標は熊本鎮台をやっつけることにあったものですから、西郷さんの私学校というのは兵士・軍人を育てるとのことばかり考えている。私は西郷さんに言いたい。「あんたは世界の歴史に目を開いていない。大隈とか福澤とか、いろいろな人が世界に目を向けて歴史の進行方向を目指したからこそ今門前市をなしてその大

学に来ているんでしょう。まだその頃は愛知大学のことは言えません。そういうことで西郷さんにももの申したのは私だけです。

愛知大学の父たち

さてそのぐらいにして、林先生の長女の方が鎌倉に住んでおられまして、私は何度か電話でお話ししたことがあるんですが、「父の林毅陸の記録や本がいっぱいある」とおっしゃるので、私はリュックサックを用意して伺うための用意して楽しみにしていたんですが、しばらくしまして「あれは私の勘違いだった」と。「私は父の遺産と言うべきものは慶應大学に寄付してしまった」。慶應の図書館のインフォメーションに行きまして、それが今ある場所が分かりました。東横線だと思うんですが、白楽という駅です。だから皆さんの中で林毅陸先生をお調べになる時には、白楽に行って調べられる必要があると思います。これは大島さんがいろいろ研究していらっしゃるのでも老婆心ですが、白楽に行けば林先生の書かれたもの、林先生がお使いになったものが分かると思います。それを複写して大学研究室で参考にしたらいいと思います。

林先生が大物であるということを私は浅井さんにも言いましたので、浅井さんは私のところに3回ほどお見えになりました。林先生は東亜同文書院の母体である同文会で理事をしておられましたけれども、1回も欠席しておられない。それほど

同文会に対して熱心であった。それから清算人であった。先生のお宅は渋谷の伊達町にあったと思います。本間先生がしょっちゅう通われたということを知りました。初めはお1人だったようですが、それはおそらく建学時の用件だったと思います。小岩井先生は最後の1回だけお見えになった。これはやはり趣意書を書くには相当慎重な交流が必要だったと思います。そういうふうに通文会を通じて同文書院に熱を入れておられたということは、やはり愛知大学を作るにあたって学長を引き受けられたと思うんです。これは私が帰ってきて今泉潤太郎先生にご報告申し上げました。

さてそれではあの建学の精神は誰が書いたかというのが関心があったんですが、これは本間先生が、林先生が亡くなられて慶應大学の大学葬があった時に、愛知大学教職員代表、学生代表として弔辞を述べておられます。本間先生が書かれた弔辞の中に、あの全文は林毅陸先生がお書きになったということで、初めて建学の精神が書かれたのが誰かということが分かったわけです。

なお先ほど言いましたように林先生のことを詳しく調べようとなさるなら、白楽に行ってお調べになることが必要だということをお知らせします。林先生は偉大な人で慶應大学の福澤諭吉に次ぐナンバー2の地位にある人ですが、愛知大学についても非常に貢献をなさったわけで、私は大学の父という言葉を使っておりますが、私が専門にやっているアメリカ憲法史の中で、憲法の父、ファーザー・オブ・ザ・コンスティテューションという言葉を使っていますが、大学関係の重要な人を、私はベルリン大学の父、愛知大学の父と呼んでいます。

アメリカでは独立宣言と、それから連合規約とか州憲法がありますので、数えてみると55人になります。そこでアメリカではその人達を「フィフティーナイン」というのがあります。大学の場合はそんなのはありませんけれども、やっぱりそれに匹敵するものがあって、ベルリン大学は、フ



元氣かくしゃく、質疑に答える酒井先生

ンボルト、フィヒテ、シュライエルマッヘルの3人です。

フンボルトは恩師の林田教授からしょっちゅう聞いていましたけれども、勉強は不足であります。私はロックの勉強とかエマーソンとかマディソンとかいうほうに行ったものですから、フンボルトのほうの勉強はせずにいたんですけれども、ベルリン大学というところになるとフンボルトの勉強をせざるを得ないので、時期は遅かったと思っています。

ところで私が大学史をやるに到ったのは実践的な意味があるんです。と言いますのは、昭和44(1969)年は世界的に荒れ狂った大学紛争の年です。その年に山田文雄先生は学長になられた。そのあと、私は法経学部時代で、まだ私は40代の半ば過ぎですから体力的には困らなかったんですけれども難問がありました。

学生の側から出てくる問題は紋切り型で、大学の自治は何かかんとかで、彼等の質問は幼稚ですし、答えるのは簡単だったけれども、しかしそれを機会に私に与えられた問題は、大学の歴史をもっと真剣に勉強する、取り組まなければいけないということで、私の勉強は憲法の他に大学論ということになって、その後私はいろんな大学の研究をしました。大学史については本間先生と愛知大学に限って申し上げますと、愛知大学の管理形態は二元的であると。それは教授会と理事会がもちろん今も愛知大学はありますけれども、そうい

う二元的な形態であります。だから大学の教授会、協議会が経営のことを云々すると、ちょっと誤ることがあるんですね。それで一番失敗したのは大高問題だと思います。あの時教授会が素人の教授だったものですから失敗しまして、給料の未払いはありませんでしたけれども遅配があった。しかしそれも堪能な本間先生の力によってわれわれはちゃんと給料をいただいた。二元的だということが愛知大学の管理形態の特徴だと思います。しかし大高問題は払い下げの値段が思ったよりも高額であったためにこの基金を利用して移転することができたわけです。災いを転じて福となすというのはこのことだと思います。

林先生に話を戻しますと、林先生は漢学の素養があるものですから、あの文章をご覧になると漢文調でしょう。林先生がお作りになったということが本間先生の弔辞の中ではっきりしました。それを探した時はやっぱり非常に嬉しかったです。そこで武田学長と事務局長に報告をしているわけです。私はレジメの中で大事なことは愛知大学の「愛知」の問題だと思うんです。

愛知大学とベルリン大学の特徴

一方、ベルリン大学の特徴とは何かと言うと、ナポレオンによって敗北したベルリンの町には、ナポレオンの馬蹄の音が高らかに鳴っていた。そしてナポレオンはその前にフランスで職業的専門



酒井先生ご自宅書棚を説明

学校を作った。これをドイツに強制しようとしたんですが、ドイツ人はこれを拒否したんです。1810年にベルリン大学が開学しました。当時、ドイツ国民の再建の意欲は極めて旺盛でした。そして2代目の学長シュライエルマッヘル。シュライエルマッヘルは「ベルリンにおける大学の伝統」とか、ちょっとタイトルは正確ではありませんが、これを書きました。

ところでベルリン大学を論じる前に愛知大学の「知を愛する」というようなことは、慶應大学、ハレ大学とゲッティンゲンの大学があります。このハレ大学、ゲッティンゲンの大学の中で「リベルタス・フィロソファンディー」、これはラテン語で「哲学する自由」ということですが、愛知大学の「知を愛する」はこれに共通するものがあると思います。

それから大学研究会、これは大学史研究も大事なことで重要な課題ですけれども、これをもっと総合して研究すべきであり、カリキュラムの問題とか、あるいは組合がやってる給与の問題、あるいは不幸にして非行を犯した場合の処罰、重いのは国の裁判所がやりますが、学内では懲戒の問題がありますから、そういうものを総括する部門を。私はそれについては広島大学の大学研究所をモデルにしております。昨日も私のところに書類を送ってきましたけれども、私は広島大学の研究所の研究員にもなっておりまして非常に参考になる。われわれ広島とかローカルのものだと思うのは大間違いで、あそこには必ず東京大学の天野郁夫先生もおられます。広島大学の研究所をモデルにして研究して、それを愛大の大学研究のシステムにしたらどうかと思います。年寄りなので余計なことですけれども。しかし何でも言いたい。昨日も余計なことですが事務局長に「豊橋の町もオランダに似てきた」。と言うのはあっちこっちに風力発電が出てきているんですね。そこで電気代の採算といろいろ。ただ音がするのをうまく防げるかどうか分からないけれども。愛大でも風力発電を考えられたらどうだと、素人が余計なこと



長年を過ごした愛知大学に対する想いは人一倍、桜満開の時

を言って耳を汚したわけです。

さて本題に戻ります。大学史を研究することになったのは孫子の兵法ではなくて、クルマロジの竹中半兵衛の戦術を真似したので、学生のほうに先んじられていることが多かったわけですが、私の書いた本で、タイトルは『学問の自由・大学自治の研究』です。これが注目されるようになったのは、広島大学が中国の文部省、国家教育委員会から招かれたことがあり、その時「中国の大学を制度化したいと思うが、日本で読まれているのはどんな本があるか」ということで、所長が「酒井のこの本だ」と。それが中国の文部省と北京大学の目にとまって、私は北京大学の客員教授になったわけです。

中国はその頃、友好関係の順位が変わってきた。第1はソ連、第2はアメリカ、第3は日本だったのが、第1がアメリカ、第2は日本だったかソ連だったか、順位が変わったものですから、中国としては日本のこととアメリカのことを知りたいということになって、私は北京大学に行って、大学院の学生20人ぐらいでシンポジウム、ゼミをやりました。一般学生については講演をやったことがあります。

ここでちょっと息抜きの話なんですけど、私は退職後8年間陶芸のお師匠さんに通いました。私の狙いは、この方非常にうまい方で永仁の壺の模作を作成してほしいと思ったのです。私は永仁の壺



古橋先生の元で陶芸を学ぶ

(模作)を持っていますので、永仁の壺よりも私がしたかったのは、ロダンの「考える人」を陶芸の作品で作りたかったんです。家内の看護のためこの夢を果たしていませんが、これは世界で50個ほど同じものがあるって、だいたい50万円ぐらいしますから、これを武田先生に買ってください。愛大の大事なところにロダンの陶芸品を。もう1つは豊橋の土地の赤土、これは非常に陶芸にいいと思います。この赤土でもってこういうものを、愛大の豊橋と三好と車道に1個ずつぐらい置いてもいいんじゃないかと思っています。

また話は戻りますが、私の思想構造の中、学問の方法論の中にはマルクス主義の影響がある。私の憲法の発端は労働各説から始まっています。その後武田先生の社会民主主義の本を読んで「これだ」と思って、社会民主主義の武田先生の本に依拠して書いています。それから平和主義を論じる前にはやっぱり軍国主義の問題を。これは戦争中われわれが読まれたヒットラーの「マイン・キャンプ」とクラウゼヴィッツの「戦争論」です。そしてそれが日本に移ったんですね。フランスの影響も強かったと思いますが、戦争中は敵国の英語は使えないと言うけれども、フランス語は堂々とまかり通っていた。

ところが桂太郎かなんかが、ドイツの参謀本部



「中国人民のアメリカの友」エドガー・スノーの墓前で
1977年12月

をモデルにしてベルリン士官学校と陸軍士官学校の軍事学もクラウゼヴィッツに頼りました。そして彼の「戦争論」。日本もそれをモデルにして日露戦争を行なって勝ったと言われています。日露戦争についてわれわれは中学校で、ルーズヴェルトが非常に好意的であったと言いますが違うんです。それは資本主義はいろんな矛盾から恐慌が出てくる。その恐慌を解決する方法にはやっぱり戦争（ゲバルト）に訴えることが必要だということで、軍隊がそこにおいて「俺達がお助けしましょう」というので戦争になる。だから日露戦争はロシアの南下を防ぐこともですけれども、アメリカもまた満洲その他に投資していると思うんです。

ちょっと飛びますけれども、私は北京大学にお世話になった時に、外国人宿舎を右に行くと東大の赤門と同じような正門がある。そこを出ると毛沢東の銅像がありますが、その頃は個人崇拜はなくなったからみんな知らんぷりをしておりました。正門から入って行って小高い丘があってお墓がある。ああ中国だなあ、大学の中にお墓がある。それはアメリカ人のエドガー・スノー。米中友好の碑と書いてあります。

東亜同文書院と愛知大学の創設との関係

中国との関係で申し上げますと、同文書院はご承知のように卒業論文として大旅行を行なう。当

時、参謀本部の地図がその頃は一番優れていたと言ってもいい。中国とソ連の境界辺りは曖昧だった。同文書院が現地に行って調べているとこれが一番利用し易いわけで、それを利用したものですから同文書院はスパイの学校だというふうに誤解を受けて迷惑をしたわけですが、のちにそんなことはなかったということが分かった。

同文書院は、ただ優秀な人材を育成することにあつて、そしてそれは決してスパイの養成でも何でもない。

そして話を戻しますが、総司令部民間情報部（局）の調査の最も重要な結論を見ますと、愛知大学を作るのは京城大学の復活でもなければ同文書院の復活でもない。同文書院は中国研究の第一線に行く優秀な大学であるというマッカーサー司令官の見解が返ってきています。マッカーサーは日本にいる時に善政を敷いた。いいことをしたのは2つあって、1つは憲法の平和主義を認めたこと。それから愛知大学の平和主義の大学を認めたこと。それはマッカーサーが善政を残した結果であります。憲法はフィリピンの憲法をモデルにしています。そういう点はアメリカは正直だと思います。

私はハーヴァードにいる時に隣がMIT（マサチューセッツ工科大学）だったので、よくその当時行った時に、ああ山本さんもここに留学されていたんだなあと思って、哀悼の意を表したことがありますけれども、東郷に次いで尊敬されていた



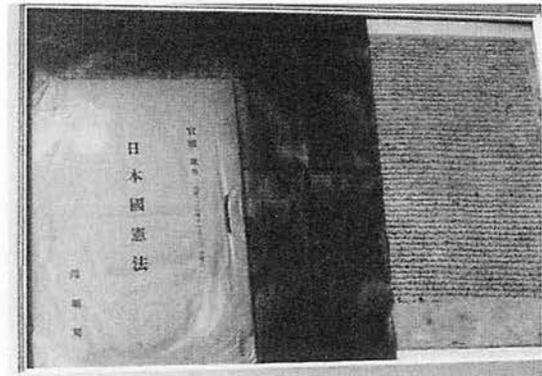
左から藤田佳久センター長、大林文敏教授、山本晃司主幹と

軍神山本五十六。彼はご承知のように、小泉さんが総理になって「米百俵」の話をしていましたが、あの「米百俵」の小学校の出身なんです。私は四大私学史として慶應大学、早稲田大学、同志社大学、そして愛知大学を書こうと思ったこともあります。ですから慶應の百年誌とか同志社の百年誌とか、そういう本をいろいろいただいておりますが、これはもう私は使えませんので、皆さんの大学研究所に差し上げます。もっとも学校には図書館への寄贈があると思いますけれども、これをお使いになったらいいと思います。

なお私は今日の話簡単な言葉で言えば、「愛知大学外史」と呼ぼうと思っています。これは頼山陽の「日本外史」の真似をしているわけです。頼先生に断ろうと思って電話帳を見ますけれども、頼山陽の電話番号が載っていませんので連絡をしております。皆さんが公式に大学の正式の会議の決定でなさったのは「正史」ですね。私のはせいぜい「外史」にあたると思うんです。だから今日から「日本外史」ではなく「愛知大学外史」と呼ばせていただこうと思っています。

いろいろ話が飛びましてとりとめがありませんけれども、武田学長、山本事務局長の寛大なご好意によって林毅陸さんが大物だと、そしてその人が建学の精神を書かれたのだということが分かって、その時ほど嬉しいことはなかったです。その根拠が本間先生の弔辞ですからね。そういうことがいろいろ思い出されます。林先生は昭和25(1950)年に亡くなっていらっしゃるから、昭和27年に愛知大学に助教授として就任した私は、先生にお目にかかったことはありません。まだ海のものとも山のものとも分からない私に、本間先生の大物の持つ法学の授業を持たせていただいたのは最高の荣誉であり、今回の講演は第二の荣誉であります。

平和主義の問題はやっぱり国際連盟というものができるあたりですね。国際連盟と国際連合は大きな違いがあります。やはり林先生は外交史の専門の方ですから、愛大ができる頃国際連合ができ



日本国憲法

ることをご承知なんです。第一次世界大戦のあとのヴェルサイユ条約によっているので、フランスのクレマンソー、イギリスのロイド・ジョージ、アメリカのウィルソン、こういう人達のいろいろな計略があって、ウィルソンの理想主義とクレマンソーおよびロイド・ジョージ現実主義の妥協であった。一番失敗したのは、ドイツの皇帝を戦争犯罪人として裁くことが決まったんですけども、皇帝はオランダに亡命した。このため、オランダに向い、皇帝の引渡しを要求することとした。しかし、オランダは、その要求には応じなかった。無論ドイツは、戦争の末、降伏したのではなく、軍部の巨頭ルーデンドルフ自身、勝利の望みを失い、みずから進んで講和の承諾を促したのであったけれども、当時、敵軍は、一兵たりとも、ドイツ領内に侵入したのではなかったです。一般国民は敗戦の現実を十分感知せず、大国としての自負と意気は、なお盛んなるものがありました。ドイツ人の気持ちと食い違いがあるんですね。

平和維持のための保障力、活動力が、大いに強化されています。1944年8月21日より9月27日まで、ワシントン郊外のダンバートン・オークスで開かれた米英ソ三国会議において、10月9日、米英ソ中四国の名において発表されました。1945年6月26日に正式の調印がされました。1946年1月10日から15日まで、第1回総会をロンドンで開き、連合の中核機関である安全保障理事会(security council)も同時に開催され、本式の活動を始めました。理事会は11カ国よりなり、米、英、



DECLARATION DES DROITS DE L'HOMME
ET DU CITOYEN
「人間と市民の権利の宣言（人権宣言）」
1789年8月26日に出された。フランス革命

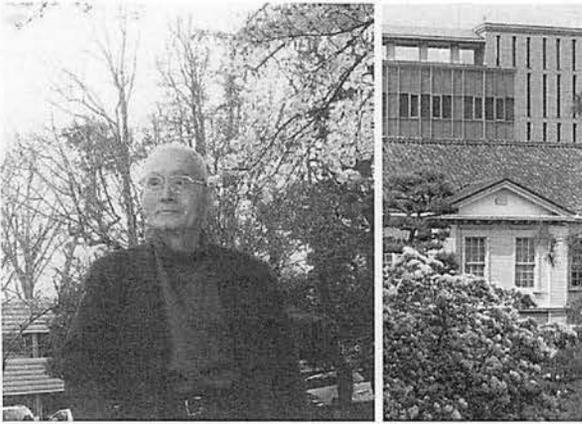
ソ、仏および中華民国の5カ国が常任理事国であり、任期2年で、非常任理事国としては、ポーランド、オランダ、エジプト、メキシコおよびオーストラリアの6カ国が当選しました。

そして国際連合の主要なる機関のうち、安全保障理事会は、最も重要な中枢機関であり、絶大な機能を与えられています。国連で一番大事なのは安全保障理事会。国際連盟の正当防衛に当たる自衛権というのを認めている。理事会が武力行動の決議をする場合、加盟国は、武装兵力その他通行権を含む援助、ならびに便宜を提供する義務がある。理事会は、かくして、一種の参謀本部となり、国際軍（国連軍）を動員させることになる。軍事参謀委員会は、常任理事国の参謀総長またはその代表をもって構成する（41条）。私は昭和15（1940）年に法律の勉強を習い始めたんですが、刑法の36条に正当防衛というものがあります。「自己または他人の権利を防衛するために、やむことを得ざるに到る行為はこれを罰せず」。不戦条約には、アメリカがおくった自衛権の留保があった。その中に「すべての国は、いつでも、また条約の規定にかかわらず、攻撃や侵入から自国の領域を守ることは自由である」という文書があり

ました。51条はそれをそのまま表現したものである。自衛の措置は、必要な限度に限られるが、しかし、実行にはその限度を越えて乱用される危険性が少なくない。自衛権の発動は、安全保障理事会が国際の平和および安全の維持に必要な措置をとるまでの間、認められる。安全保障理事会が、そのような措置をとった場合には、自衛権にもとづく措置は当然停止しなければならない。外国の自己防衛という時に、被害国は立ち向かって戦争をすることができるわけです。けれども国連憲章51条の規定にありますように国際連合の安全保障理事会が決定をした以上は、各国の自衛戦争はやめなければならない。こういうことを、林先生は外交史の専門ですからちゃんとお存ですね。そういう国際法、国際外交、国際関係などに通暁している林毅陸先生を初代学長に持ったことは、愛大にとって幸せであったと思います。林先生について申し上げることは、非常に傑物であった。慶應大学でも福澤諭吉に次いでナンバー2に置かれるくらいです。愛知大学でこの先生を学長に迎えたことは幸いであると思ひます。

愛知大学設立の客観的要請は、国際的教養と視野をもつ世界文化と平和に貢献する人材を養成する国際文化大学の創設である。われわれの責任は、旧来の軍国主義的、侵略主義的第二次世界戦争によって、招いた日本の物質的、精神的荒廃を再建することです。この点1806年、ナポレオンと闘って敗北したプロイセンが「物質的に失ったものを精神的なもので取り返さなければならない」と決意したウィルヘルム三世のメーメルでの決意と同じであると思ひます。

趣意書に「今後の再建は、民主主義を実現し、自らを文化、道義、平和の新国家として再建することではなければならない。而して世界平和に寄与すべき日本、人文の興隆と有為なる人材の養成といふ点に盡きる」と。フンボルト等によって指導された文化国家を、愛知大学は継承していることは明白で、その上、日本国民の願望を代弁して、愛知大学の父たちは、平和国家を力説しています。



愛知大学設立に思いをはせる

就中、多年の研究に蘊蓄を固めた国際法、外交史の専門家である林毅陸がリードしたと思います。

そういうことで思い出すことはいろいろありますけれども、あまり時間をとるのは皆さんにご迷惑となりますので、このあたりで話は打ち切らせていただきます。

では長くなりましたのでこれで失礼します。ご清聴ありがとうございました。



司会 それではまだ30分ありますので、何かご質問がございましたらお尋ねください。話がのってきますと次第に元気になられたので大丈夫です。初めはちょっと心配しまして、今日できるかなと思っておりましたけど。

今泉 今泉です。質問ではないんですが大変面白くて。88歳ということで心配しておりましたけれども、本当にしっかりお話ししてくださって。新しく知ったこともありますし、本当に面白く聞かせていただきました。

大変ありがとうございました。質問ではなくて、脈絡がよく分かりました。

酒井 今泉先生とは同志的結合で、縁のことで一生懸命応援して下さった他に若手の優秀な人を紹介して下さって助けられています。

司会 大島先生どうぞ。

大島 大島でございます。本日はたいへん結構なお話をいろいろ伺いまして、ありがとうございます

ました。この際ぜひお聞きしておきたいことが2つございます。気軽にお答えいただきたいと思います。先生のものはいろいろ読ませていただいて、先生のご主張はかなり自分としては理解したつもりでございます。1つはベルリン大学の創設と愛知大学の創設との間には非常に近似性があるという点全く賛成でございます。古い体制がドイツの場合はナポレオンの侵攻によって崩壊し、新しい国作りをしなければならない。そのためには今までの大学とは違った新しい大学を作って人材を養成しなければならない。こういう中でベルリン大学の理念が作られたわけです。愛知大学の場合は第二次世界大戦に到る非常に非民主的な、あるいは軍国主義的な体制が敗戦によって崩壊し、これからしっかり平和的、文化的、民主的な国家を作らなければならない、そういう義務感から若者を養成するために創設された。150年の時間を隔てているとはいえ、ある意味で非常に似通っておりまして、時代は異なるけれど愛知大学とベルリン大学は、同じような創造的な意味を持った大学だというふうに考えております。

そこで質問なんです、愛知大学の創立者達と言われる林毅陸先生、本間喜一先生、小岩井浄先生が、どなたでもいいし皆でもいいんですが、ベルリン大学の設立の経過や、あるいはシュライエルマッヘルといった人達の考え方をそれまでに知っていて、愛知大学がそれに倣って創立されたのかどうか。本間先生はベルリン大学に留学されるんですけども、そういうことを前もって知っていてその考えを愛知大学に適用されたのか、それともそれほどはっきりは知らずに、ただ歴史の流れの中で歴史の要請に応えた結果、ベルリン大学と愛知大学に類似性が表れたのか、この点を先生はどうお考えになっておられるかを、まずお聞きしておきたいと思います。

酒井 脇坂先生が最初にベルリンに留学しておられます。それから本間先生も。小岩井先生は知りませんがいらっしゃったんじゃないかと思えます。あの頃は東大がベルリン大学だと思ったのは、



愛弟子の大林文敏教授と

東大の法学部を出た優秀な人は皆ベルリン大学に行っています。ベルリン大学は東ドイツの時でもフンボルトの名前を付けていますね。あなたがいらっしゃった時はフンボルト大学だったでしょう。私も思想の遍歴がありますが、イギリス革命を書いた時はマルクス主義の影響を一番受けていたと思います。

大島 特にお聞きしたいのは、創立者の方々はベルリン大学に倣って作ったのか、それほど意識していなかったのかという点です。

酒井 協坂先生と本間先生はベルリンに行っていますけれども、林先生はフランスで勉強しています。フランス語が得意でフランスに憧れて行っていますから、ドイツのことはあまり考えてないんじゃないかと思えます。

大島 酒井先生、本日はたいへん無理を言わせていただきまして、心よりお礼を申し上げます。今頃こんなことをと思われるかも知れませんが、最近愛知大学では2つの方向で大学史の研究が盛んに行なわれるようになりました。1つは講義の中身です。「大学史」という科目も出まして、先生方がリレー講義という形でヨーロッパの大学の先生から日本の旧制大学、東亜同文書

院、愛知大学の最近に到るまでいろいろ講義をなさっております。私もその1つを担当させていただいております。もう1つは最初に藤田先生からご指摘がありましたように、この愛知大学、東亜同文書院記念センターのオープンリサーチセンターの中に大学史という部門を設けまして、そこでもいろいろな人の援助を得て、協力しながら大学史を研究しております。

いずれにせよ、ひとりよがりにならないこと。つまり自分の大学だから悪いことはあまり触れずに、言いにくいことは言わずいいところばかり取りあげて、ひとりよがりの大学史になってはいけない。そういうご注文もありまして、いろいろな難しい問題も率直に出して、ただしそれを自分達の方で克服していった、解決していったんだということまで、ちゃんとお話ししよう。そうすれば学生達がどういう大学だ、どういう特徴のある大学だということも分かるし、また教員も自分の大学についてアイデンティティーを持つことができるという観点でやっています。

そういう中で本日の酒井先生のお話は、非常に大きな視野で世界の大学史の中で愛知大学を考えるというお話であって、たいへん示唆に富み、いろいろ参考になりました。おそらく酒井先生には「もう少し若かった時、あるいは在職中になぜやらんのか。今頃になって引っ張りだしよって」というお気持ちもあろうかと思えますけれども、それは少しご寛容を願ひまして、今後ともいつまでもご壮健で、またこういう機会にお話ししたり討論をさせていただければたいへん喜ばしい次第でございます。酒井先生本日はたいへんありがとうございました。

司会 それでは酒井先生の「世界大学史と愛知大学」の講義はこれをもって終了いたします。盛大なる拍手をお願いいたします。